様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月１２日現在

機関番号：３４６０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１７３０６５０

研究課題名（和文）演劇的手法を用いた学習活動に関する総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive Study on Learning Activities Using Drama Methods

研究代表者
渡辺　貴裕（WATANABE TAKAHIRO）
帝塚山大学・現代生活学部・准教授
研究者番号：50410444

研究成果の概要（和文）：理解の深化をもたらす媒体としての演劇的活動に着目し、学習に役立てられる演劇的手法とその意義について次の３つの方面の研究を行った。１９４０年代後半から５０年代にかけての日本の学校劇運動を分析し、当時の議論の到達点を明らかにした。イギリスのドラマ教育の理論を検討すると共に、現地の学校においてフィールドワークを行い、演劇的手法の運用の具体像を明らかにした。日本の学校の教師たちとの共同研究により、日本の教育課程における演劇的手法を用いた授業・単元の開発を行った。

研究成果の概要（英文）：Focusing on drama activities as medium for deeper understanding, drama methods and their significance were explored in three fields. School drama movement in Japan in the late 1940s and 1950s was analyzed and the achievements and the problems were indicated. Theories of drama in education in England were examined and practices of drama in education were revealed through fieldwork in schools in England. In collaboration with teachers in Japan, lessons and units using drama methods in Japanese school curriculum were developed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１２年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：教育方法学
科研費の分科・細目：教育学・教育学・教育方法
キーワード：演劇的手法・演劇教育・ドラマ教育・劇化・動作化・学校劇・学習方法・身体性

１．研究開始当初の背景

ドラマワークショップなど、従来の学芸会での劇上演などとは異なる形での学校教育と演劇的活動とのつながりが近年注目を集めている。しかし、そこには次の３つの課題が存在している。１つめは、演劇的活動がもっぱら「コミュニケーション」や「表現力」などと結びつけられ、既存のカリキュラム領域ととの結びつきがほとんど注目されていないということ。２つめは、イギリスなどのドラマ教育の紹介はさかんに行われるが、日本の教育現場で実際にそれを試みる取り組みが進んでいないということ。３つめは、日本で蓄積されてきた、演劇的手法を用いた実践の整理、検討がなされていないということである。

これらの課題の背景には、演劇的活動がもつ、理解の深化をもたらす媒体としての側面に目が向けられてこなかったという事情が存在する。しかし、本来演劇的活動は、現実の自分以外の存在となって架空の状況を擬似的に体験する活動である以上、理解の深化にも寄与し得るはずである。実際、１９７０年代末以降のイギリスのドラマ教育は、ドラマを「学習の媒体」としてみなす発想を軸に発展してきた。日本では、演劇的活動がもつこの側面に目を向けていないため、既存のカリキュラムの学習における活用が進まず、また、イギリスのドラマ教育や過去の日本の実践の中から有効な指針を汲みとることもできないでいるのである。

２．研究の目的

本研究では、演劇的活動がもつ、理解の深化をもたらす媒体としての側面に注目し、次の３つを柱に据えて総合的な研究を行う。

①戦後の日本において蓄積されてきた、演劇的手法を用いた学習活動を、主に実践記録を調査することによってさらに掘り起こし、それぞれの特徴や意義、限界などを明らかにする。

②イギリスのドラマ教育に関して、「理解のためのドラマ」「カリキュラムを通してのドラマ」の考えに基づいた実践に着目し、文献調査および現地調査を通じて、その理論や実践の手法の特徴を明らかにする。

③①②を通して得られた知見をもとにして、既存のカリキュラム領域における演劇的手法の活用について、現場の教師と連携して授業研究を行う。それによって、演劇的手法の活用方法をより具体的に明らかにする。

３．研究の方法

①の日本の教育実践の蓄積の掘り起こしについては、戦後の教育雑誌や実践記録の単行本などをもとに文献調査を行う。

②のイギリスのドラマ教育の理論および実践の検討については、文献調査および現地の学校や関係機関でのフィールドワークを行う。

③の学校現場との共同研究については、実践協力者や協力校を開拓し、授業や単元の考案、実践、検討のサイクルを実施する。実践場面はビデオで記録し、分析に役立てる。

４．研究成果

（１） 研究の主な成果

①日本の教育実践の蓄積の掘り起こし

学校劇がブームとなり、国語科や社会科において劇化を伴った学習が盛んに試みられた 1940 年代末から 50 年代にかけての演劇教育関連資料を蒐集し、分析を行った。その成果を、日本教育方法学会および日本演劇学会において発表した。教科学習における演劇的活動に関して、動作の真似事に過ぎないといった批判があったこと、また、それら批判を克服する方向性として、劇指導の系統性の確立、教室文化活動への拡張、身体への着目、現実を批判的に捉える媒体としての劇という４つが存在したことを明らかにした。

②イギリスのドラマ教育の理論および実践の検討

ドラマ教育関連の文献の蒐集、計４回の短期滞在による現地調査を行った。現地調査では、小学校や中等学校でのドラマの授業の観察と記録、教師へのインタビュー、ドラマ教育関連団体のスタッフへのインタビューなどを行った。

ドラマの手法を使っての物語世界の体験が国語教育の観点からはどう意味づけられるか、Ｊ．ニーランズの理論とロンドン郊外の小学校において観察してきた実践事例をもとに考察を行い、論文にまとめた。これは全国大学国語教育学会の学会誌『国語科教育』に掲載された。まず、ニーランズの理論より、伝統的な物語を使ったドラマの活動について、日本で物語の「読み」の一環として行われてきた演劇的活動とは異なる２つの特徴があることを明らかにした。「静止画」「マイム」「ホットシーティング」といった各種技法の存在と、直接的な叙述の再現にとどまらない、本文が描く物語世界との関係の持ち方である。次に、実践事例より、授業の組み立ておよび活動の運用に関する４つの特徴を抽出した。ティーチャー・イン・ロールを駆使した、次第に展開が明らかになっていく進行方法、物語に直接的に描かれていない部分の創作、目的に応じた技法の使い分け、空間配置や音楽・照明の効果的な使用である。さらに、こうしたタイプの授業を、国語教育の「物語への理解」「話す・聞くの技能」「読むことの技能」「書くことの技能」の４つの視点から意味づけた。主体的かつ協同的な関与による物語世界への没入体験と多面的な心情理解、真正性があり切実感がある状況のなかでの言語使用、読書への欲求、架空の世界の体験による書くべき内容の創出などである。

ドラマの活動において教師が果たす役割に注目して実践事例の分析を行い、日本教育方法学会において発表した。教師の役割として「役モード」「教師モード」「語り手モード」の３つを抽出した。「役モード」の機能として、架空の状況に巻き込む、話を進展させる、子どもが最大限に力を発揮しなければならない状況を作るの３つを見出した。「教師モード」の機能のうち、個別の活動を超えたルールの確認に着目し、意義づけた。「語り手

モード」が、語りが生み出す想像の世界が実際の空間において具現化され、逆に実際の空間において子どもたちが生み出したものが語りのなかにも取り込まれることによって、現実世界と虚構世界を橋渡しする機能を果たしていることを示した。

「話す・聞く」とドラマとを結びつける試みに着目し、日本の国語科における「話す・聞く」に与える示唆を明らかにし、全国大学国語教育学会において発表した。日本の国語科における「話す・聞く」の活動には、フォーマルな場面設定が多い、自分自身あるいは自分と等身大の人物としての活動が求められる、文学的素材が活用されないという３つの特徴がある。一方、イギリスでの「話す・聞く」とドラマとを結びつける取り組みの場合、虚構の設定での現実の自分とはかけ離れた役になっての音声言語活動の多さと、絵本・神話・戯曲・小説などの文学的素材の活用という２つの特徴がある。そのうえで、方向性として、切実な言語使用を行う状況を作り出すための設定の借用元として文学的素材を用いるというものと、話し言葉の特性を理解し自らの「話す・聞く」と照合してそれを改善するための材料として戯曲台本を用いるというものとがあることを示した。

③学校現場との共同研究

愛知県、兵庫県、京都府、滋賀県、山口県の公立小学校、大阪府の中学校、三重県の高等学校の教師らと共に演劇的手法を用いた授業の共同研究を進めた。それらをもとに、2012 年 4 月に研究グループ「学びの空間研究会」を設立した。そこでは、(A)演劇的手法を用いた学習活動の考案と試行、(B)創出された活動の学校現場での実施、(C)その実践報告と検討というサイクルを繰り返してきている。それにより、小学校国語の物語文や外国語活動、中学校国語の文法での実践など、日本の教育課程における具体的な実践像を生み出してきた。

また、この手法を活用できる教師が増えるよう、埼玉県の公立小学校、三重県の公立高等学校、鹿児島県の教育委員会、民間教育研究団体の大会などで、演劇的手法に関する研修会を実施した。

（２）得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

『演劇と教育』誌での連載「授業で活かす　演劇的活動のチカラ」が「演劇教育の原点に立ち、その可能性を指し示す素晴らしい指針」として高く評価され、2010 年 8 月に日本演劇教育連盟より第 50 回演劇教育賞を受賞した。

全国大学国語教育学会の学会誌『国語科教育』に発表した論文が「国語教育の今日的要請に応える優れた論文」として高く評価され、同学会より 2012 年 10 月に「第 1 回優秀論文賞」を受賞した。

本研究の一連の成果を、2013 年 3 月、帝塚山大学における科学研究費助成事業研究成果地域還元報告会「想像力を生かす学習　授業における演劇的手法」において発表した。

（３）今後の展望

現在の日本の学校において演劇的手法を用いた優れた授業をさまざまな教科・単元にて創造する取り組みはまだ始めたばかりであり、実践事例を蓄積すること、実践過程を分析して授業論の立場から検討を加えること、この手法を活用できる教師を育てる仕組みを生み出すことが課題として残されている。2013 年度から 2016 年度の４年間の予定で新規申請し採択された科研費若手研究(B)「演劇的手法の活用に関する授業論の構築と教師の力量形成の仕組みの開発」において、研究をさらに発展させていく。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

１．渡辺貴裕「ドラマによる物語体験を通しての学習への国語教育学的考察　――イギリスのドラマ教育の理論と実践を手がかりに――」全国大学国語教育学会編『国語科教育』査読有、第 70 集、2011 年 9 月、100-107 頁
http://ci.nii.ac.jp/els/110008750137.pdf?id=ART0009824693&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1370774255&cp=

〔学会発表〕（計６件）

１．渡辺貴裕「ドラマと国語教育の結びつき――虚構性を活用した「話す・聞く」能力の育成――」全国大学国語教育学会第 124 回大会自由研究発表、2013 年 5 月 19 日、弘前大学

２．渡辺貴裕「演劇的手法を用いた学習活動における教師の役割　――イギリスのドラマ教育の実践をもとに――」日本教育方法学会第 47 回大会自由研究発表、2011 年 10 月 1 日、秋田大学

３．渡辺貴裕「教育方法のトポロジー（３）――教科学習と結びついたドラマ活動――」日本教育方法学会第 46 回大会ラウンドテーブル、2010 年 10 月 10 日、国士舘大学

４．渡辺貴裕「物語とドラマ活動の結びつき――ジョナサン・ニーランズのドラマ教育論をもとに――」全国大学国語教育学会第

117 回大会自由研究発表、2009 年 10 月 17 日、愛媛大学
5．渡辺貴裕「授業における演劇的活動　――1950 年代の学校劇の検討をもとに――」日本教育方法学会第 45 回大会自由研究発表、2009 年 9 月 27 日、香川大学
6．渡辺貴裕「戦後日本の学校における授業と演劇」日本演劇学会自由研究発表、2009 年 6 月 27 日、大阪市立大学

〔その他〕
1．渡辺貴裕「講座報告　ドラマ教育指導者のためのワークショップ」『演劇と教育』649 号、2012 年 11 月、22-29 頁
2．渡辺貴裕「ドラマ教育の技法を使って「学校に行きたくない」状況を考える」『授業づくりネットワーク』第５号(通巻 313 号)、2012 年 4 月、34-39 頁
3．渡辺貴裕、佐々木博、福田三津夫「鼎談「ドラマのある授業」を考える」『演劇と教育』633 号、2011 年 4 月、4-16 頁
4．渡辺貴裕「国語の授業に活かすドラマの活動」『授業づくりネットワーク』第 307 号、2011 年 2 月、17-19 頁
5．渡辺貴裕「手順の遂行を越えて」『演劇と教育』第 630 号、2010 年 12 月、1 頁
6．Takahiro Watanabe, ‘Primary Drama from a Japanese Perspective’, Dialogue (The newsletter of London Drama), No. 164, May 2010, p.3
7．渡辺貴裕「授業で活かす　演劇的活動のチカラ　⑧演劇的活動の充実のためのポイント」『演劇と教育』第 618 号、2009 年 10 月、42-47 頁
8．渡辺貴裕「ドラマ的手法で学習活動の幅を広げる」『授業づくりネットワーク』第 291 号、2009 年 10 月、7-9 頁
9．渡辺貴裕「授業で活かす　演劇的活動のチカラ　⑦実際の状況と結びつけての学習」『演劇と教育』第 617 号、2009 年 8 月、44-49 頁
１０．渡辺貴裕「授業で活かす　演劇的活動のチカラ　⑥学習媒体としての演劇的活動の強み」『演劇と教育』第 616 号、2009 年 7 月、48-53 頁
１１．渡辺貴裕「授業で活かす　演劇的活動のチカラ　⑤物語文の授業での演劇的活動」『演劇と教育』第 615 号、2009 年 6 月、44-50 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
渡辺　貴裕（WATANABE TAKAHIRO）
帝塚山大学・現代生活学部・准教授
研究者番号：50410444